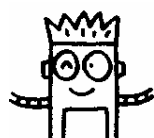


せいしょうなごん 清少納言は、どんな人だったの



宮中で、機知に富んだ才女として活躍し、その時の体験をもとに、「枕草子」を書いた人だよ。

「清少納言」とは、宮中でのよび名（女房名）で、本名はわかりません。966年ごろ、清原元輔の娘として生まれました。清少納言の「清」は、清原氏の意味ですが、「少納言」がついたわけは、わかりません。清原氏は和歌の名門で、父元輔も歌人でした。末娘の清少納言は、父の友人の詩人・歌人たちにかわいがられながら、かしこくて頭の回転が速い、早熟な少女として育ちました。

中宮付きの女房になり、才能を発揮した

981年ごろ、橘則光と結婚し、翌年に則長を生みました。993年に離婚し、一条天皇の中宮（皇后ではない、天皇のきさき）の定子に仕える、中宮付きの女房になりました。定子の父は関白の藤原道隆で、陽気な性格の人でしたから、そこは、明るく、機知（すばやくはたらく知恵）を喜ぶふん困気の職場でした。清少納言は、そこで才能を十分に発揮しましたが、そのために、ほかの女房からねたまれ、紫式部も日記に、彼女の悪口を書いています。

実家にこもっている時期に、「枕草子」を書き始めた

996年に定子が宮中から去ると、清少納言も、道長側に内通しているといううわさを流されたため、実家にこもりました。宮中での体験をもとに、随筆「枕草子」を書き始めたのは、この時期のようです。997年に定子が復帰すると、清少納言も復帰しました。1000年に定子が亡くなると、翌年につとめをやめ、1008年ごろに、「枕草子」を完成させたようです。その後、どんなくらしをしたかについては、わかりません。摂津守の藤原棟世と再婚し、歌人の小馬命婦を生んだ、といわれていますが、その時期についても、わかりません。

ことばの意味 女房 宮中に仕える女官（女性の役人）や、貴族に仕える侍女のこと。